

日時 : 6月30日(日) 9:00~10:00
会場 : 2階ホール
配信方法 : Zoom ウェビナー

座長

服部 昌和 医療法人厚生会福井厚生病院 院長

演者

西岡 大輔 大阪医科薬科大学 総合医学研究センター医療統計室 講師/
南丹市国民健康保険美山林健センター診療所 所長

概要

世界的に社会の在り方を考える指標として、これまでの GDP から最近では GDW 即ち Well-being という概念に価値が置かれ注目を浴びている。Well-being データが測定されるようになったことでより重要視されてきている。「Well-being 実感が高い地域は必ずやいい地域医療が行われている」と確信され、地域医療における Well-being について、この機会にどのような指標としてとらえ活用していけるのか？ 我々へき地・地域医療学会員こそが考える機会を持つためにも、地域医療を实践されなおかつ社会学的研究にも携わられている西岡先生からお話をお聞きし、一緒に考え明日からの地域医療に役立てていきたい。

座長：服部昌和（医療法人厚生会福井厚生病院 院長）

地域医療における Well-being：住民、地域、医療者の視点

西岡 大輔

大阪医科薬科大学 総合医学研究センター 医療統計室 講師
南丹市国民健康保険美山林健センター診療所 所長

近年、人々の健康（Health）だけでなく、ウェルビーイング（Well-being）を支える視点が注目されるようになってきました。Well-being は健康だけでなく、幸福度や生活満足度、それらと密接に関連する自己実現や生きがいなども包含している概念です。

地域医療における Well-being の向上には、住民ひとりひとり（個人）の Well-being の達成が大切です。その目標に向かって、これまで医療は個人の疾病リスクを最小限にし、個人の健康増進・疾病管理を最適化するような支援を行ってきました。しかし、時代の変化とともに疾病構造が変化したことにより、人々は複数の疾病に罹患しながらも社会的な役割を担うようになりました。そのため現代の医療には、疾病の治療だけでなく患者個人が病気を抱えながらも生活満足度の高い暮らしを送ることができるようにケアする役割が求められます。これこそが Well-being に注目した支援です。そのためには個人が創意工夫し日々の生活を送る力（Creative Capacity）や、病気のリスク（病因：Pathogenesis）とは異なる健康の秘訣（健康因：Salutogenesis）を理解することが必須です。

個人の Well-being には社会的な因子も作用します。そのため、地域医療の Well-being を考える際には、地域レベルの Well-being の評価と向上も求められます。社会的な因子として代表的なものは、地域の物的資本と社会関係資本です。また、地域医療の Well-being を支える専門職のひとつである私たち医療従事者も社会的因子の一つであり、医療従事者の Well-being について考えることも重要です。これらの地域レベルの Well-being を高めるような考え方の工夫を共有します。

しかし、どのような活動が個人および地域レベルの Well-being を達成するかには、画一的な答えがありません。本講演をきっかけに、私たちの日々の医療がどのように地域の Well-being につながるのかをともに考えましょう。

【略歴】

医師、社会福祉士、介護支援専門員。

2012年に神戸大学医学部卒業後、東京勤労者医療会東葛病院で初期研修・後期研修（救急・総合診療プログラム）を開始。診療現場で貧困や孤立など、人々の健康の社会的決定要因に触れたことをきっかけに、2017年に東京大学大学院医学系研究科社会医学専攻に進学し博士（医学）を取得。並行して江戸川学園おたかの森専門学校社会福祉士養成課程に入学し社会福祉士を取得。

2020年12月より現職（現、大阪医科薬科大学総合医学研究センター医療統計室）。また、2021年4月より南丹市国民健康保険美山林健センター診療所の所長を兼任している。

複合的な困難を抱える人々の健康権・受療権の保障を目指すべく、当事者や現場の支援者、政策決定者などの話を伺い、研究者だけで研究を完成させないことをモットーとしている。

日本プライマリ・ケア連合学会健康の社会的決定要因検討委員会委員
日本医療ソーシャルワーカー協会理事